

もう一つのホテル

台湾・台北

Taipei

丹下憲孝 = 文・キャプション
NORITAKA TANGE

「僕は、100以上部屋があるホテルには泊まらない。」そう公言してはばからないのは私の友人M。彼は私同様、海外出張のプロであるから彼の意見を目の前に、素通りをするわけにもいかない。Mが直感的に指摘している問題は、ホテルの規模が大きくなればなるほど、機能的な充実度は増すが、プライバシーが守りにくくなるなど、享受できるホスピタリティの質は必然的に低下せざるを得ないということであると私は思う。

皆さんもよくご存じのように、一流と呼ばれるホテルのほとんどにはクラブフロアの類が備えられており、エクストラチャージさえ払えば、質の高いホスピタリティに保障されたひとときを大規模ホテルにおいても得ることができる。しかし、そこにとどまることなく、空間体験としての豊かさを、ハード、ソフトの相乗効果として追求してこそ、単なるクラブフロアの域を脱却し、明快な世界観に裏打ちされた、もう一つのホテル、“Hotel in Hotel”とも呼べる域に達することができるのではないだろうか。

台湾を訪れる際、お世話になることが多い「グランド・フォルモサ・リージェント・タイペイ」は、538室を擁する比較的規模の大きなホテルであり、他の同規模ホテルと同様に、“タイバンフロア”と呼ばれるもう一つのホテルを内包している。ブランドホテルチェーンの国際的な展開に対し、生き残りをかけ、数年前にオープンしたこのタイバンフロアは、ホテル最上部のクラブハウス、スパなどと連続するように、その直下階に配置され、それ自体は台北市内を見渡すことのできる客室と、専用ラウンジによる2層構成を基本としているが、スパなども含めたホテル最上部4層が、1つのプティックホテルのようでもある。

かなり照度を抑えた空間が印象的なタイバンフロアは、ダイナミックで明るいメインエントランスに象徴される全体のイメージとは対照的に、スパと併せ、落ち着いたあるZEN的な雰囲気を生み出しており、全く別のホテルを訪れたかのような気分させてくれる。この明らかな空間の差別化は、“Hotel in Hotel”としての位置づけをより効果的に演出しているだけでなく、決して新しくはないこのホテルの新陳代謝を促す良い材料となっているようにも思われた。そして、互いに趣向を異にする新旧の素材が、乖離することなく1つの器に収まっているのは、長きにわたり培われてきた質の高いホスピタリティや、それを支える理念が力強くも柔らかく、それらを包み込んでいるからなのであろう。

現に、しっとりとした雰囲気の専用ラウンジは、“Home Office”のような感覚で、スタッフやクライアントと時間を共にする場である一方、我が家のリビングで友人たちと過ごしているかのようでもあり、パブリックとプライベート、双方のシーンに耐え得る空間を質の高いホスピタリティが支えてくれている。この原稿と格闘していた私を冷やかにきていたMは、少し辺りを見回し、「なかなか良いじゃないか」と言い残し、私の前を去っていった。皆さんはいかがだろう、100室以上部屋のあるホテルは…。*

たんげ・のりたか——建築家/1958年生まれ。ハーバード大学視聴環境学、工業エンジニアリングを卒業後、ハーバード大学大学院建築学専門課程を修了。2003年より丹下都市建築設計代表取締役社長。
主な作品：サルバトーレ・フェラガモ・フラッグシップショップ（2003）、東京プリンスホテルパークタワー（2005）、統一グループ台北本社ビル（2005）、上海銀行本社ビル（2005）、キャセイ・シネプレックス（2006）など。

メインロビー



華やかさと、優美さを兼ね備えた「グランド・フォルモサ・リージェント・タイペイ」のロビー。エントランスの奥には大きな吹抜けが控え、迫力のあるエントランス空間を演出している

タイバンラウンジ



もう一つのホテルへ。深い色で統一された、オリエンタルモダンな雰囲気が特徴的なタイバンフロア



ベッドルーム コーナービューのベッドルームからは、台北の街並みを望むことができる。統一感のあるデザインは、ラウンジからリビング、ベッドルームまでを連続的なものとしている

タイバンフロア ゲストルーム



リビング 通常の客室のインテリアは、ホワイト及びベージュを基調としているのに対し、シルバークレーやパープルといった、落ち着いたある色調が採用されている

専用ラウンジは自分の部屋と、ホテルとの中間領域。間口の広い1枚ガラスが、ラウンジに広がりをもたらしている
(写真提供：丹下都市建築設計（5点とも）)

